The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 「懐徳堂考」
Author(s)	佐藤, 由隆
Citation	懐徳堂研究. 2013, 4, p. 105-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26944
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評「懐徳堂考」（中野三敏・楠元六男編『江戸の漢文脈文化』所収）

佐藤由隆

一　序言

明治四十三年（一九一〇）、のちに重建懐徳堂の理事兼講師となる西村天囚は、大阪朝日新聞に、「懐徳堂研究其一」と題した連載を始めた。その連載内容が、同年のうちに『懐徳堂考』と改題されて上巻として刊行され、翌年には下巻が刊行されて完成を見た。『懐徳堂考』。三宅石庵・五井蘭洲から並河寒泉に至る懐徳堂百四十年の歴史を通覧したものであり、その内容は、今日においても懐徳堂を研究するにあたって基本とすべきものとして、きわめて重要な価値を持ち続けている。

その『懐徳堂考』と名を同じくする章が設けられた論文集が、このたび出版された。中野三敏・楠元六男編『江戸の漢文脈文化』（竹林舎、二〇一二年）である。

本書の編纂意図は、巻頭の中野三敏氏による「はじめに」に明記されている。すなわち、従来「俗の側面（サブ・カルチャー）」にばかり光が当てられてきた江戸の文化を、漢文脈文化によって捉え直そうとする試みである。文中の言葉をさらに借りれば、近年の「急ぎすぎた近代主義への見直し」を背景に、「江戸を最も非近代的な時代として、敢えて否定的に遇する」姿勢から脱却するべく、それまで「余りに不問に附し続け」られてきた漢文脈文化こそが「江戸の主教養そのもの」であり文化の土台であるとし、そこに焦点を当てることで「日本文化の本質の一面を抉りだ」すことを目的としている。

それゆえに分野も多岐に渡っており、計二十の論文が六章に分けられて並ぶ。以下の目次を見るだけでも、あらゆる側面から漢文脈文化を見出して照らし出そうとする試みが窺われる。

目次

一　思想へのアプローチ
近世日本の『論語』―その「誤読」の読み方―　（大谷雅夫）
近世漢文考證随筆管窺―夜半鐘声を題材として―　（長尾直茂）
近世中期思想界における諸子百家的現象の流行　（中野三敏）
東アジア仏教のキリスト教批判―明末仏教から江戸仏教へ―　（西村玲）
漢文による歴史人物批評―幕末期昌平黌関係者の作品を中心に―　（合山林太郎）

二　懐徳堂考
幕末の漢文力―ロシア軍鑑ディアナ号と懐徳堂―　（湯浅邦弘）
松平定信と懐徳堂　（寺門日出男）

三　漢詩への提言
文天祥「正気歌」と十九世紀文学　（杉下元明）
『北里歌』における市河寛斎韜晦の方法―いわゆる「長慶以後の手段」について―　（池澤一郎）
頼春水の茶山詩評―『黄葉夕陽村舎詩　後編』の成立事情―　（小財陽平）
朱子学者の夢―十八世紀朝鮮の儒者と日本の儒者の詩をめぐって―　（福島理子）

四　諸資料の検討
和漢聯句の版本二件　（深沢眞二）
松花堂昭乗と『和漢朗詠集』―慶長十七年写本、および近世前期刊本を中心に―　（山口恭子）
『十番詩合』について―狂詩史への定位―　付・本文と校異　（堀川貴司）
『日本詩選』の編纂と刊行　（高橋昌彦）

五　近世小説の背後にあるもの
浅見絅斎と中国白話小説　（徳田武）
身と心―『八犬伝』にいたるまで―　（西田耕三）

六　俳諧への視座
『奥の細道』における〈千歳の記念〉　（母利司朗）
松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし　（楠元六男）
人見午寂と享保俳壇　（大庭卓也）

本来ならば、全ての章を対象として批評すべきではあるが、今回注目するのはその第二章である。一目瞭然だが、その章題こそがすなわち「懐徳堂考」であり、二名の研究者による論文が収められている。懐徳堂を知る者であれば、「懐徳堂考」と聞いてまず思い浮かぶのは西村天囚のそれである。あまりにも著名な研究書と同一の名を冠したそれは、いったいどのような意図でものされ、どういったことを述べたものなのであろうか。ここでは当該第二章の論文二本に焦点を絞る。これ以外の各章については、楠元氏の跋文に簡潔な紹介が記されているので、ご参考戴きたい。

二　幕末の漢文力
―ロシア軍艦ディアナ号と懐徳堂―

（湯浅邦弘）

本稿は、幕末期の大坂において、ロシア軍艦ディアナ号が来航した際にその外交交渉の場に立ち会った、大坂学問所「懐徳堂」の教授、並河寒泉がその事柄を記録した『拝恩志喜』を中心に据えて述べられる。江戸期の外交交渉の場において漢文がいかなる力を発揮したかということの一例として紹介すると同時に、当時の「攘夷」という思想に対しても考察を試みたものである。本文は冒頭と末尾に「はじめに」と「おわりに」が付されており、内容は大きく四つの章に分けられている。

まず「一　ロシア軍艦の来航」である。ディアナ号の大阪湾碇泊から書き起こされるこの章は、異国との交渉に第一外国語であるオランダ語が使われる一方、同時に漢文も筆談や外交文書の作成に用いられていたことがまず述べられる。そこで西村天囚『懐徳堂考』を引用し、この時は懐徳堂の教授の並河寒泉と預かり人の中井桐園が、「応接の史官」を拝命してロシアとの交渉に一役買ったのだ、ということを示す。しかし『懐徳堂考』においては、なぜか『拝恩志喜』の名が登場しないのである。そればかりか、具体的な交渉の様子、特に漢文による筆談が行われたのかどうかについては「詳（つまびらか）ならず」と記されているのだ。そこでつづいて紹介されるのが、中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』である。こちらでは寒泉が桐園とともに「漢文」によって「応接」し、さらにその顛末を『拝恩志喜』という漢文の記録に残したことが明記されている。なぜ、このような記述の相違が見られるのか。その疑問を導入部であるこの章に据えた上で、以降は『拝恩志喜』の内容の検討に入っていく。

続く「二　漢文による筆談」が、『拝恩志喜』の概観

である。ここにおいて、九月十八日から十月二日まで、ディアナ号来航から交渉の顛末に関することを要約して紹介することにより、寒泉が確かにロシア側と接触し、文書を介した間接的な交渉と船上での筆談による直接交渉を行ったことが明らかとなる。そして『懐徳堂水哉館先哲遺事』は『拝恩志喜』を実見して記したのに対し、『懐徳堂考』は実見する機会を得なかったため未詳と述べたのだという見解を提示することで、先の問題には一応の解答を出す。しかし、そうは言っても天囚がその内容ゆえあえて無視した、あるいは意図的に隠蔽した可能性も捨てきれないとも述べることで、次の章にて『拝恩志喜』から窺われる寒泉の思想を検討するための布石を置いている点で抜かりない。なお、この書の原本が大阪大学懐徳堂文庫内にて発見されておらず、東京大学資料編纂所蔵の抄本を参考にしたことも合わせて述べられている。

そして「三　「皇国」と「夷狄」」。いよいよ『拝恩志喜』において窺われる寒泉の思想の検討である。ここで遂に明らかにされるのが、寒泉の強烈な攘夷の立場を示す、激烈な文言の数々である。激しい語句を用いながら、ロシア側よりもたらされた文書の稚拙さを指弾し、外交交渉の場における態度を非難する。退去ののちディアナ号が沈没した報を聞くや「痛快」と語り、坂上田村麻呂の蝦夷征伐や元寇を挙げ、「皇国」は「外夷と接せずして自足」できる地理的環境にあることから対夷狄の方針もこれに基づくと説き、今回の沈没も「膺懲」であったと述べるのである。こうして、寒泉がかなりの敵意・蔑視をもって交渉に臨んでいたことがここで明らかとなった。ではやはり、天囚はその思想の強烈さゆえに「詳ならず」と述べたのか。しかし筆者は、ここでもう一度『懐徳堂考』を引用することで、天囚が寒泉の攘夷の姿勢を批判的に捉えていた訳ではないことを示してみせる。そうしてやはり「詳ならず」としたのは実見できなかったからなのであろうと結論づけるに至る。

最後は「四　並河寒泉の「攘夷」」。考察の締めくくりとして、前半は寒泉自身にとってのディアナ号来航の顛末と自らの行動の意味についての検証が行われる。その結論として提示されるのが、寒泉自身は当該事件を、自らの学力により、また、官命をもって「夷艦」を駆逐したというように捉えた、というものである。その根拠となる二つの業績が、漢文による外交交渉であり、この章で紹介される、退去したディアナ号の追跡であるという。そして筆者はここで寒泉のものした「告懐徳堂諸先修廟文」を引き、寒泉が今回の「攘夷」の実践を、懐徳堂の全盛期を築いた外祖父・中井竹山の『逸史』献上による

褒賞の栄誉に匹敵するものだと認識していた、ということを分析している。つづく後半は寒泉の思想形成の背景を検証する。まず懐徳堂と水戸学との関係を述べ、懐徳堂の歴史学の立場として「正閏論」を挙げることで、元来懐徳堂の基本的立場としてあった「尊王（尊皇）」が幕末に至って「攘夷」の思想へと移行したという見解を述べつつ、ロシア観についても中井竹山『草茅危言』や『懐徳堂夜話』を挙げ、その影響を示唆しながら章を終えている。

以上が、本文の概略となる。附記にもある通り、かつて発表したものを本書に収録するために加筆修訂したものである。そのため通読してみると、本来の趣旨は懐徳堂最後の教授である並河寒泉の「攘夷」の思想、およびその背景の考察であろうことがやはり推測される。そうして見た場合、論を展開するための伏線も周到であり、寒泉を通した懐徳堂の対外思想を検討するにあたって非常に興味深い内容であることは間違いないであろう。

しかし今回注目するのは、それを江戸期の漢文脈文化という観点から見直した場合、どのような意味が生まれてくるのか、ということに対する筆者の見解である。これこそが本書『江戸の漢文脈文化』の編集意図であり、収録するにあたって第一に求められる要素であることは言うまでもない。この点について、筆者はどう捉えているのか。

それを知るために、本稿の「おわりに」の一部分を以下に抜き出してみたい。

> 適塾の学生も動員されたようであるが、おそらくは、ロシア側にオランダ語に通じたものがいなかったのであろう。以後の交渉は、漢文によって行われた。ここに漢文の偉大な力を見ることができる。言語は、通常、発音を伴わなければ意思の疎通が困難である。しかし、漢文を構成しているのは、表意文字である漢字である。筆談による意思疎通が可能となる所以である。寒泉の思想は、基本的には攘夷にあり、必ずしもこの漢文力は、友好的外交交渉に役立ったという訳ではない。しかし、懐徳堂の教授がその漢文力により、巨大軍鑑を大坂湾から退去させたと捉えられていたのも事実なのである。
>
> （一三六、一三七頁）

この箇所を見ると明瞭であろう。すなわち本書を漢文脈文化の点から眺めた場合、漢字というアイテムが表意文字であったために異国との外交交渉においても互いの

意を通じ合うことができた、という意味が見出せるというのである。管見を述べると、その根拠となるのが、おそらく本文中にも引用されている『拝恩志喜』の一節であろう。九月二十日、ロシア側のもたらした「夷奴文書」を一読して、寒泉は「文滅裂、字潦草、顛倒有り、誤字有り、歯牙に上すに足らず」と述べている（一二九頁）。そして筆者もこの件について、「支離滅裂な漢文で大意をつかむのが精一杯であると一喝した」と説明している（一二六頁）。ここで重要なのは、文は滅茶苦茶であるが大意は判った、ということである。つまり、そうして大意を掴むことのできた理由こそが、表意文字の威力そのものであったのだ、ということがここから窺い知ることができる。この点が、漢文脈文化の観点から眺めた場合にまず注目されるであろう点のように思われる。そうして考えると、漢文の重要性を示すものとして、その機能性を見ることができるのは明白である。

しかし本稿ではそれに加え、寒泉の「攘夷の実践」という思いを指摘することによって、その実践に活躍した漢文の国際的汎用性をも浮き彫りにしているように思われ、非常に興味深い。実践が成功するためには、まず漢文が国際的に通用する意思疎通の手段であることが前提になければならないからである。そのような国際的な意思伝達手段を用いて、寒泉は見事に夷艦を駆逐してみせるのだ。「駆逐」したと認識していることが判る直接的な記述は残念ながら提示されていないが、想像に難くなく、説得力を持った論となっている。

ただ、今回採り上げられた『拝恩志喜』自体が寒泉の視点から書かれたものであるため、自らの漢文力が「巨大軍鑑を大坂湾から退去させた」と寒泉自身は感じていた、その業績について、当時の人々はどのように捉えていたか、という点が未だ明らかにされていない。この点については、さらなる検討を必要とするものであると思われる。すなわちロシア軍鑑の襲来とその退去を、民衆はどのように受け止めたのか。それに関してさらなる具体的な史料の発見がなされた暁には、このたびの主題となる漢文脈文化を、さらに民衆の範囲にまで広げる可能性を秘めているのではないだろうか。

三　松平定信と懐徳堂（寺門日出男）

本稿は、懐徳堂の全盛期を築いた第三代学主・中井竹山およびその弟・中井履軒と、時の老中・松平定信との関係における従来の見解に疑問を投ずる趣旨のもとで論じられたものである。特に中井竹山と言えば、松平定信

より諮問を受け、さらには自らの具体的な政策案をまとめた『草茅危言』を幕府に献上したことでよく知られており、履軒もまた、定信から招聘を受けた際にそれを断ったというエピソードが伝わっている。このことから、二人が松平定信の政治思想、ひいては寛政の改革に大きな影響を与えたと受け取られる傾向にあったが、筆者はこれに対し、「これまで十分に検討されてこなかった諸資料を吟味」し、新たな見方を提示しようと試みたことが窺われる。本文は「序」と「結」の他、大きく「一　定信と竹山」「二　定信と履軒」に分けられ、この二章はそれぞれ三節に細分されている。

まずは「一　定信と竹山」。竹山と定信の政策がいかに異なるものであったかということを、『草茅危言』を主に用いて、三つの観点から検証していくものである。

第一に蝦夷政策。ここでは、寛政蝦夷の乱以後も、依然として松前藩に一任しつづけた幕府に対し、竹山は、公正な交易が実現するように取り締まり、また流人を蝦夷地に入植させるという具体的な方策を提示して、アイヌ人と友好関係を築きながら日本の文化・風習になじませていくという積極的な政策案を展開していることが明らかにされる。また一方で、竹山は蝦夷地を歴史的にアイヌ人のものと見て、武力で攻め取り版図とすることには反対しており、農耕を教え国字を習わせたりすることで日本の風に染まるように仕向けるようにと述べるに留めている。明記はされていないが、竹山が蝦夷の開拓に反対したと誤解されたのは、おそらくこの点ゆえのことだと思われる。筆者はこのような政策を、徳によって四夷を帰順させるという、儒家の政治思想によるものだと指摘するのである。

第二に経済政策。特に寛政の改革で実施された棄捐令について、それが後に商人達の貸し渋りを招き、旗本・御家人のさらなる困窮を招いたことを紹介しながら、竹山はそれに対して批判的であったことを明らかにしている。武家にとって有利で一方的な棄捐令に対し、竹山は武家と商人との後々までのつき合いをも視野に入れた政策を提示していたというのだ。これも明言されてはいないが、それは竹山が大坂人であり町人であったことも関係している、ということが示唆されているように思われる。

第三に文教政策。京都における官許学問所の設立許可願い、または懐徳堂の増築願い、さらには焼失による再建願いと、三度にわたる竹山の願い出に対して幕府、すなわち定信がいかに冷遇したかということがまず述べられる。一方で具体的な文教政策として、定信が寛政異学

の禁で、昌平坂学問所にて朱子学以外を講ずることを禁止したのに関連して、竹山の考えを検証する。すなわち竹山は、朱子学を批判する伊藤仁斎学派や、陽明学派でさえも一概に排除する考えを持っていなかったということが、『竹山国字牘』を引用することによって明らかとなり、竹山が『非徴』を著して徂徠学を激しく攻撃したのは単なる学派間の勢力争いによるものではなかったという見解が示されるのである。

次に「二　定信と履軒」であるが、これは履軒の蝦夷政策のみが考察の対象となっている。というのも、履軒作とされる、蝦夷政策に関する言及が見受けられる文献として本稿で挙げられた三種のうち、二種がその資料としての適否をまず検証すべき段階にあると判断されたためである。そうしてつぶさに検証されたのが『辺策』、『年成録』の二種であり、三番目に大変信用性の高いものとして挙げられた『髦言』と比べても、かなりの紙幅を費やして述べられていることが判る。

第一に『辺策』について。ここで筆者は四つの疑問点を挙げることで偽作説を唱え、履軒の作ではないと断じ、さらに履軒の名がかたられた理由も三点挙げることにより、その論の説得力を高めている。管見を述べると、その過程において、履軒が抜群の学識を持って世間に高く評価される一方、実態が全く分からない人物として世に知られていたことも同時に明らかにされている点が興味深い。

第二に『年成録』について。ここではまずこの文献を用いて松平定信の蝦夷政策とまさに一致すると指摘する論があることを紹介した上で、三つの観点からそれに反駁する。一つめは『年成録』の成立時期が寛政の改革期よりもかなり時代をくだったものであるということ。二つめは執筆当時の時代背景、すなわちロシア船来航に伴い越冬警備に駆り出された東北諸藩が多数の犠牲者を出したことに対する批判が込められているのであり、消極的な政策とは断ずることができないこと。そして三つめは、やはり本当に履軒自身の著作なのかという疑問である。しかし、まったくの偽作であるとは述べられない。ここではその書名と履軒の人となりとの矛盾を指摘し、『年成録』鈔本とよく併せられる『月可録』なる書に注目し、『天楽楼書籍遺蔵目録』で確認される『月下録』が実は現存の『月可録』ではないかという仮説を提示する。そうすると、『月下録』という書名であれば「未だ覿（み）ざる」、他者の手による稀覯書に履軒が題したものということが考えられるのだという。すなわち『月下録』が『月可録』と書き誤られ、やがて呼応して『年成録』

が作られ、ひいては履軒の政治に対する姿勢が誤解されたのだ、と考えられ、この書もまた履軒の蝦夷政策を知るための資料として信頼性に欠けるものと判断されるのである。

第三に、『髦言』について。ここでようやく履軒の蝦夷政策に対する見解に辿り着く。筆者のまとめをそのまま引用すれば、すなわち、「日本人が暴利を貪ることを憎み、アイヌが苦しめられることを哀れみ、その利権に固執してロシアと争うよりは、蝦夷をアイヌ人の手に返すべきだ」という主張である。そして筆者はこの意識を「竹山と同様」と述べる。以上のように、履軒についての考察は、履軒の思想というよりは、その前段階として、履軒の思想を検討するために相応しい文献かどうかを精査する方により重点が置かれているものである。

こうして本論を述べた上で、最後の「結」にて改めて筆者の見解が述べられる。そこで定信の経済政策と、竹山と履軒のそれとの相違が述べられる。しかし、やはり定信との比較対象としては、今回は主に竹山の政策が目立っており、結論も竹山を中心として語られている。まとめると、定信が「自己中心主義的」であるのに対し、竹山は経世済民を本分とする「儒者としての立場を貫いている」と分析されている。履軒についてはそれに付随するように、そうした違いのために招聘に応じなかったのかもしれないと述べるに留まっているのである。

その一方で終わりに言及されているのが、西村天囚の『懐徳堂考』の著述の意図である。筆者はそれについて「懐徳堂を顕彰する目的で書かれたもの」だと述べ、執筆当時の明治末頃は定信が英雄的存在として認識されていたため、定信と竹山および履軒とのエピソードがそのための「格好の素材であった」としている。よって、そのために正しく評価されてこなかった面があることは否定できず、そうしたフィルターを取り去り、改めて日本思想史の中に適切な位置づけを行っていかなければならないと説く。

以上の内容を概観してみると、次のことが判る。すなわち竹山の政治思想については、『草茅危言』という格好の考察対象があるわけで、それは文献資料として、定信の行った寛政の改革の内容との比較検討を行うに足るものなのである。本稿ではそれに対し、履軒の政治思想、特に蝦夷政策を知るためには、まず手に取る文献資料の妥当性から再検討する必要があったことが明らかにされる。『草茅危言』を改めて精読することにより竹山の政策と寛政の改革で実施された政策の差異を明らかにしたことも鮮烈である一方、履軒の蝦夷政策に対する従来の

誤解を明らかにし、あるいは履軒作とされる資料の再検討を促したことも、大変重要なトピックである。結果として、履軒の蝦夷政策を知るための資料がごく限られたものとなってしまい、『草茅危言』という豊かな資料を持つ竹山の思想と同様と断定するには、やや不安が残らざるをえなくなってしまったが、これは今後の課題としてさらに検討していくべき点であるように思われる。

中井竹山・履軒兄弟は、言うまでもなく、懐徳堂というものを見るにあたっては決して無視することのできない存在である。したがって、その二人の思想に対する従来の見解の再考を促すことは非常な意義があるものと考えられる。

四　結語

以上、「二　懐徳堂考」所収の二本の論文を取り上げたが、両者に共通するのは、西村天囚『懐徳堂考』を参考にしながらも、それを部分的に乗り越えようとしている点である。刊行より百年以上、その研究書が今なお権威を失うことなく存在しつづけているのは、それが名ばかりのものではなく、研究書として大変優れたものであることを証明するものである。しかし、懐徳堂研究を志す者は、その功績に敬意を表しつつも、新たな資料、新たな視点を用いることによって、新たな見解を生み出していくこと、すなわち、先人のなした大きな壁を果敢に乗り越えていくことが求められるのである。本書における第二章、「懐徳堂考」という題は、筆者達のそうした並々ならぬ意気込みを代弁しているように感じられ、それぞれの内容もまた、それを如実に表している。これを契機として、第二、第三の『懐徳堂考』が誕生することを切に願うばかりである。